

二匹のやどかり

千葉県 野村 知子

昼食後、子どもにテレビを見せながら台所で皿を洗っていると、見知らぬ男性が勝手口から家に入ってきた。

白いランニングシャツに紺のスラックス姿で、黄色い洗面器を脇に抱えている。白髪まじりの短髪で五十がらみに見える。無言のままこちらを見てすぐ横を向き、廊下に出て行った。ドアをあける音と脱衣かごを置く音がして、シャワーの湯沸かし器が作動した。

さつき食卓を囲んだ義父母たちは、奥の部屋に引き上げている。同居して三日目で、暮らしの勝手がわからない。彼の慣れた様子は、近所の人か親戚か。農村では人が断りなく家にあがることがあるのだろうか。下着のランニングシャツに外出着のスラックスという取り合わせが、ちぐはぐだった。

彼が誰であろうと風呂場にいることだし、今は一歳半の子どもにお昼寝をさせるのが先だ。手すりをつたい階段を一段ずつ上る子のうしろから、よいしょ、よいしょと節をつけて促す。わたしも片手は手すり、片手は臨月のお腹をさすりながら上る。

二人目を妊娠し、自然が豊かな土地で子どもたちを育てたいと思った。夫と一緒にどこでもやっていける。わたしから言い出して彼の実家に同居した。

居室となった二階の二間は、前にいたアパートから持ってきたエアコンの設置がまだで、窓と戸を全開にして扇風機をつけた。一緒に横になって寝かしつけていると、下から建付けの悪い引き戸の音がした。男性は出て行ったようだ。

義父母が話す土地の言葉は半分くらいわからない。義母に急に話しかけられて、よくわからず、何度も聞き返すのも悪くて、調子を合わせている。彼女の「やってくつたい」は、丁寧なのか、親しみなのか、切り口上なのか、言外の意味がつかめない。

「昼間にへんな人が家に入ってきて、シャワーを浴びたのよ」
夜、二人になったときに夫に訊いた。

「叔父さんだよ、親父の末の弟。人と付き合うのは苦手だけど、子どもに危害を加えるような人じゃない。俺が小さいころから物置小屋に住んでいるんだ」

怒るとお腹の子が動く。苦しいのではないかと、努めて穏やかにしてきた。

「披露宴の席次で、お義父さんの兄弟の人数を聞いたとき、指折り数えて途中で、多すぎてわからないって、言ったよね。その人のことを、実家の父や母は知らないわよ。せめて同居する前に言うものじゃないの」

彼は、なだめるような目つきでうす笑いをしている。

「ご飯はどうするの。わたしが作るの？ 高齢になったら、わたしがお世話するってこと？」

「そういうこと考えるよな。三ヶ月前に、俺たちの同居を親父に伝えたとき、叔父さんのことでは迷惑はかけないって、言われた

んだ。食事は叔父さんが自分で適当にやっている。おふくろだって何もしていない。将来は、親父の兄弟がなんとかするだろう」

義父母が隠すのは世間にはあることかもしれない。しかし、義実家で夫だけは味方だと思っていた。これからも知らないうちにごまかされるのか。

翌日、昼食のあと、夫は義父を座敷に誘った。わたしたちの顔を交互に見た義父は、頭を下げた。

「恥ずかしかっただ、済まなかったな」

彼の首筋は赤茶に日焼けして皺が刻まれてる。

「もういいですよ」

謝っている人を追及はできない。

「おめえらに迷惑はかけないからよ」

夜、子どもを寝かしつけてから、テレビを見ている夫の目前に座った。

「わたしに隠し子がいて、迷惑をかけないと言ったらどう思う」

「そうだよな。はい、おやすみなさい」

次の日、義父に言われ、あとに続いて庭の井戸に來た。洗濯していた叔父さんは、声をかけられて立ち上がった。足元の洗面器には紺のスラックスと白いワイシャツが浸かっている。洗濯板と石鹸もある。

「こんだ一緒に住む尚子だ」

義父のあとに、よろしくお願いします、と頭を下げてでも彼は無言だ。

「いいな、俺からも頼むだよ」

好き嫌いの感情は言わなくても伝わるものだ。義父母や叔父がわたしをどう思っているかわからないが、こちらからは嫌わないでやっていこう。

物置小屋は、土壁の総二階の建物で、藁ぶきにトタンをかぶせた屋根だ。昼でも雨戸が閉まり、外からは人が居るかどうかわからない。夫に、彼は何をしているのか訊いた。

「俺もよく知らない。タクシー運転手かなんかじゃないか。最初おれたちのことを警戒していたみたいだな、追い出されると思ったらしい」

子どもがお昼寝をしている間に、縁側に積んだままの引越しの段ボール箱を、物置小屋に運び込む。鍵を開けた義父のあとから中に入ると、雨戸の隙間から光が漏れ入り、破れ障子戸を照らしていた。

義父が蛍光灯の紐を引くと、右が八畳ほどの畳部屋で、布団が敷いたままだ。左の広い土間には肥料の袋や昔の脱穀機や柄のついた農具などが置かれていて、上には屋根裏部屋があった。

せめて障子を張り替えないのかと思ったがそれきりだ。臨月のだるい体を振り絞って片付けていて、他のことを考える余裕がない。

叔父さんが勝手口からコンビニ弁当を持って台所に入ってきた。わたしを認め、

「使うよ」

と甲高い声を発した。初めて聞いた。義父の張りのある声と違う。前のアパートから持ってきた電子レンジに弁当を置き、顔を寄

せている。

「右下のボタンです」

機械が作動すると彼は外に出て、少ししたら戻って取り出していった。警戒心が薄れて、ひと言ことわったのかもしれない。

赤ん坊が生まれて、夜中の授乳後しばらく抱っこする。眠くて意識が途切れそうになるのを耐え、早く眠ってくれと願う時間は長い。昼間は寝不足でもうろうとして体だけ動かす。授乳しながらテレビをつけて、きのう見たドラマが放送されていた。へんだな、と思い、一週間が経っていたことに気が付いた。

夫は、子どもたちを頼んだよと出勤する。義父は造園会社で、義母は畑に出ていく。谷津田と小山が入り組む地域で、隣の家は五十メートルほど離れている。周辺に幼児はいるが、保育園に入っている。

隣のおばあさんが来て、

「ばあさんはいるかい」

と聞かれた。義母は彼岸の集まりで生家に行っている。

「出かけています」

「どこ？」

「ちよっとそこまで」

どれくらい親しいのかわからないので、道ですれ違った人程度の応対にした。

数日後、義母がゲートボールから帰るなり、吐き出した。

「あきれたよ。おらが離婚して実家に帰ったことになっていただ。そうじゃねえよと言ってきたがよ」

このところ畑で姿を見ないから、周囲のおばあさんたちは想像をたくましくした。様子を見に来た隣のおばあさんに、はっきり言えばよかった。

冬になり、田んぼは稲株や藁が耕耘され、雑木林は葉が落ちて、茶色の濃淡となった。赤ん坊を抱っこひもで括り付け、三輪車をこぐ長男の相手をしながら、ひと気のない景色に寂しさが胸に迫った。

スーパーへの買い物は、車に子どもたちを乗せて行く。帰りに彼らが眠るまで適当に走り、家の近くの路肩に車を止め、買ったばかりの菓子パンを食べる。

バックミラーに、こちらに近づく人が映った。紺のジャンパーに紺のスラックスの叔父さんだ。黒いサングラスをかけてレジ袋を提げ、道の端を歩いている。車の横を通り過ぎて行ってしまった。

人目を避けるためのサングラスが、冬は逆に目立って強面の印象を与える。わたしに気付いたはずだが、車内をのぞくそぶりはしなかった。気遣ってくれたのか、関わりたくないのか。自分のためにひとりを求める気持ちはわかる。

三月の風がない日だった。住宅地の公園の駐車場で車を降り、次男をベビーカーに乗せ、長男の手を引いた。公園では五人の幼児が思い思いに遊び、そばに母親がいて、赤ちゃんを抱いた人もいた。

挨拶すると、彼女たちは笑顔で応えてくれて、緊張がほぐれた。長男はすぐに滑り台にむかって駆け出し、あとを追った。

砂場に子どもたちが集まり、穴を掘ったり容器に詰めたりして遊び始めた。母親たちも砂場の縁に腰かけた。皆さんこの近くに住んでいるという。

どのスーパーが安いか、小児科や耳鼻科はどこがいいか、健診のときに保健師さんになんて言われたか、おしゃべりを聞き続ける。同世代とつながることができた。住宅地の人たちなら、在所ざいしょの農村部とは接点が少ないので、気が楽だ。

同じころ、婦人会の常会じょうかいにも誘われた。日曜日の昼過ぎに、二軒先の奥さんが迎えに来た。夫同士が同学年で、彼女のことは前から聞いていた。

「尚子さんとお子さんをお借りしますよ」

彼女は夫に笑いかけた。

昔は、常会ならばと舅しやくしやく姑こが嫁を出してくれた、と義母が言っていた。出さないと、あの家は働かせてばかりで、そんなに取れ高を上げたいのかと陰口を言われたそうだ。

集会所には、女性たちが十人ほどと幼児や児童がいた。

「お宅のばあさん、やさしいかい」

二軒先の彼女が言った。ええまあ、と言葉を濁す。

「畑に出ないんだってな。それでいいんだよ。ちよつとでも手伝うと、全部やることになる。あたしなんか、もうたいへん」

彼女はおどけて笑った。

「赤んぼをよく泣かしているんだって？ うちに来てばあさんが

言っていたよ。男の子は元気がいいよな」

親戚筋の女性に言われた。この地域には苗字が三つしかなくて、同じ苗字内で親戚付き合いをしている。冠婚葬祭など、その家になにかあれば手伝いに行くのだそうだ。

長男は、普段は保育園に行っている子らと遊んでいる。次男は、おぶっていたら眠って、座布団に寝かせた。

地域の男性は、婿さんは別として、みんなこの地で生まれ育った。常会は、よそから嫁いできた女性たちの息抜きだ。

中には、ここで生まれて家を継いだ女性もいる。おしゃべりと大笑いのなか、

「よくそう笑うことがあるよ」

と居心地が悪そうだ。

長男が三才になり、十月になったら幼稚園を選ぼうとぼんやりと考えていた。公園のママ友のひとりが小学校の産休代替教員で仕事に復帰することになった。子どもは保育園に入れるという。「急に仕事が決まったものだから、最初は実家の母に来てもらうつもりでいたの」

誰が何をしようがいいのだけれど、母親ではない時間があるのがうらやましい。境遇を変えた彼女に、取り残された感じを勝手に持った。

「保育園活動をしているとか、言ってくれてもよかったのにね」公園でママ友に言ってみた。

「ほんとよ。お宅は仕事はどうする？ 農業を手伝ったりして」

「やらない約束で結婚したの。働くとしたら、どこかよそで」

彼女によると、主婦のパートは在宅なら電話営業、近くに通勤するなら通販のコールセンターやスーパーのレジ係、物流倉庫の軽作業が主流だそう。子どもが小学生になれば、片道一時間かけて都心まで通勤する人もいる。

前職の塾講師となると、夜間保育が必要だ。次男が中耳炎を繰り返して、病院通いが途切れない。兄弟のどちらかが風邪をひけば、うつし合う。病院で病気をもらうことがあるので、元気な方を家に置いていきたいが、義母ははっきりしている。

「おら、こなんねえ。二人とも連れて行ってくろ」

義父母は若いころから田畑で働き行商もして一家を支え、子守りは祖父母がになった。夫は「じいさん子だった」と言っている。今、義父母の部屋で子どもが座机の周りを小走りすると、義母は、「目が回る、あっちでやってくれ」

と追っ払う。不慣れな彼女をあてにはできない。仕事は子どもたちももう少し大きくなり、体が丈夫になってからと腹が決まった。

お寺に大師講だいしこうの一行が来る。当番班は各戸から一人ずつ出て接待にあたる。子どもたちを夫に頼み、義母に替わって参加した。

境内に座卓を置き、お茶とお菓子を用意する。自作の漬物や苺やお餅を献納する人がいて、それらも一緒に並べられた。言われるまま茶碗を洗い、外トイレを掃除した。

一行は隣村の寺から出発し、数日かけて隣市まで各地のお寺を巡拝する。以前は、ここの寺も泊まりになっていた、当番班の家

がお宿を引き受けた、と二軒先の奥さんが教えてくれた。

ほら貝の音が聞こえてしばらくすると、白装束の十数人が歩いてきた。中高年の人たちで男性女性は半々くらいだ。白装束にも幅があり、普段着に白い上着だけまとった人が多く、上下とも白で笠をかぶった人は二人だった。足が悪くて車で先に着いた人が一人いた。

彼らは大師様のほくらの祠と、次に本堂の前で、ほら貝と鉦かねの音とともに読経と礼拝をすませた。めいめい本堂の階段や境内のベンチに腰を下ろす。わたしたちは、茶碗を手渡した。

出立のとき、もらって行くべとお菓子を手にする人がいた。

「よかったらお持ちください」

近くにいたおばあさんに勧めた。

「いしゃあ、どこの人」

彼女に聞かれ、苗字と屋号で答えた。

「おじが居るうちか」

部屋住みの叔父さんがいる家として知れ渡っていた。

義母が生家から黒猫をもらって来た。長男が幼稚園に入園し、次男が「さびしかっぺ」と彼女は目じりを下げて笑った。

クロと名付け、餌は水や牛乳でふやかしたペットフードやにぼしのおかゆをあげた。箱に猫砂を入れたトイレはすぐに覚えた。レースのカーテンに爪をひっかけて登り、カーテンレールの上で助けを求める。手を伸ばすと抱かれるのを嫌がる。幼稚園のバス停の途中までついて来ることがあり、子どもたちは遠巻きにかわ

iggatt.

叔父さんがおやつを与えるのを見かける。クロがご飯を残すのはそのせいもあるかと、ありがたくない。

井戸で洗濯する彼の足元にクロがいた。子ども靴用のたわしでクロをなでて、換毛期の抜毛を梳^すいて取ってやっている。わたしが近づくと、彼は去った。たわしは隙間なく黒い毛で覆われて、気持ち悪い。

「いやだ、毛だらけじゃないですか」

思わず声が出て周りを見た。庭の草むしりをする義父母はいない。聞かれなくてよかった。

子どもといると、その時分の記憶がよみがえる。幼稚園のころ、父の運転で養老溪谷に出かけた。山は黄色でところどころ赤が混ざっていた。渋滞でなかなか進まない山間の道を上っていくと、途中ガードレール下に、ひらがなが書いてあった。

「め、が、く、ら、ば、し。めがくらばしだって」

「あんた、読めたのね。めがくらばしでめがくらむー、なんてね」母が笑った。木々で眺望は開けていなかったが、「めがくらむー」と妹もわたしもふざけて笑った。

帰路は、母の機嫌が悪くなった。きっかけは思い出せないが、ささいなことだ。

「お父さんったら、どうしていつもそうなのよっ」

憎らしそうな母が怖かった。始めのうち取り合わなかった父は、母がなおも言い続けると本気になり、

「何が不満なんだ。勝手にすればいいだろう」

と大声を出し、あとは黙って運転した。わたしは妹と後部座席で耐えた。このいがみ合いをぜんぶ引き取って消えたかった。

小学生になって、父が、たまには鉄道で行こうと言い、家族で養老溪谷駅に降りた。沼の周りやその先も、黄色や赤に色づいた木々が続く。溪谷に囲まれた蛇行する川筋を行く。飛び石をつたってせせらぎを渡った。このカーブの先はどんな景色なのだろう。次が見たくて先頭で進んだ。また飛び石をつたうところで、妹がもう帰ろうよと泣きそうになり、父に言われて引き返した。

川は真直ぐ流れるものと思っていた。自然にできたものだが、石の壁や地形に沿って、不自然と思うほど曲がりくねるのがおもしろかった。

わたしも地形に沿って流れている。車内でクリームパンをほおばりながら気が付いた。家族の都合に沿うように、自分の形を変えて流れている。

けれども、地形に抗^{こた}するほどのわたしの都合は思い浮かばない。夢ならある。ひとりでゆつくりご飯を食べることだ。うちに親戚が集まったとき、叔母がこぼした。

「大勢で食べるのはいいわね、子どもがみんな家を出ちゃって、ひとりだと味気ないわ」

昼食のためにカボチャを砂糖醤油で煮ていた。鍋の近くにいないと焦げる。子どもたちは庭にいて、シンク横の曇りガラス戸を開ければ、すぐ見える。四歳と二歳になり、そばについていなく

ても、二人で遊べるようになったと喜んでいた。

長男の、次男の名前を叫ぶ声が聞こえた。戸を開けたら、物置小屋の底の下で炎が上がっている。急いで行くと、梱包材の発泡スチロールが燃えていて、炎は大人の背丈ほどだ。子どもを後ろに下がらせ、踏んで消そうとしたができなかった。周りに燃えそうなものは無く、発泡スチロールが燃え尽きて炎は小さくなった。

「子どもだけで焚火しちゃだめよ、家が燃えたらどうするの」

大声で言って、頭上を見たら屋根の藁に炎が見えた。すでに燃え移っていた。消防署に電話した。住所を伝え、家までの目印を聞かれて、池のそばです、すぐ来てください、燃えてる燃えてる、と実況してしまった。

義母が自転車に乗って畑から帰ってきた。

「なんでえ」

声はふるえていたが、すぐに中の物を外に運び出しにかかった。わたしも運ぼうと入った。まだ炎は見えなくて、白い煙が立ち込めていた。叔父さんは居なかった。どこかに出かけている。子どもたちが、

「お母さあん」

と言いながら入ってきた。荷物運びは諦めて、外の離れたところでしゃがんで彼らの腰に腕をまわし、屋根から上がる炎を見ているしかなかった。

義母が隣家に助けを求め、小父さん小母さんがいくつか段ボール箱を運び出した。消防車が到着し、放水を始めた。

そのころになると、地域の人が集まって来た。男性は普段着の

人と制服を着た消防団員が燃える小屋を遠巻きにして立った。女性性はエプロンがけでポットや漬物や野菜や炊飯器やプラスチックの大皿を持参した。台所でご飯を炊いておにぎりにし、かき揚げも作るという。近隣の消防団も来て、次第に数が増えていった。義父と夫が帰宅した。

小屋の壁に立てかけた折りたたみベビーカーに火の粉が落ちるのを見て、これだけ無事でもしょうがない、もういいやと思つて動けなかった。でも、誰かが引き寄せてくれて、焼けずに済んだ。二軒先の奥さんは子どもたちに、うちで遊ぼうか、と連れて行ってくれた。

「こういうのを見せるのはよくないからな」

わたしを気遣う笑みを見せた。

台所では炊き出し作りが進んでいた。年長者にこれでいいかしらと聞き、おのおのやることを心得て動く。わたしが入るとかえつて邪魔になりそうで、見ていた。あとから思うと、皆さんにそつとしておいてもらったようだ。外の様子を見に行く。

井戸の近くでマッチ箱を拾った。仏壇にあったものだ。義父は、収穫後に残る茎などの残渣を、畑の隅で燃やす。長男がいれば、呼んで一緒に火の番をする。銀紙を巻いたサツマイモを、枝の下の方に仕込んで焼き芋を作ることもある。

毎朝、仏壇にお茶とご飯の膳と線香があがる。マッチ箱はろうそくの元に置いてある。長男は、義父がそのうち片付けると言っていたのを、代わりに燃やそうとしたのかもしれない。

屋根に放水しても、火の勢いは衰えなくて気をもんだ。トタン

板に覆われたせいで、中の藁や柱に水がかからないように見えた。でも延焼は防いでくれたようだ。小屋の入り口から内部に水をかけ続けたら、下火になった。同居で持ってきた荷物はいくつか運び出せたが、昔からあったものは燃えてしまい、焦げた柱や崩れた壁や基礎部分を残して鎮火した。夫は、まだくすぶっている箇所を水をかけた。

「上がつて、お茶やってくださいよう」

義父の呼びかけに、男性たちは座敷や縁側に腰を下ろし、おにぎりやかき揚げやお茶が配られた。引き上げようとした消防士たち、手伝いの女性が、これだけでも、と茶碗を勧めた。

数えてみたら、消防署の消防車三台と消防団の小型消防車十三台が農道に停まっている。醤油差しがもつとないかと聞かれ、探していたら、

「ここにあったよ。おらたちの方が知ってっぺ」

年配の女性が笑った。

「そうさ、慣れないとたいへんだよ」

誰かが気遣ってくれた。

「おらほうの嫁は、奥様だからよ」

義母の口から奥様という言葉が初めて聞いた。

勝手口を出たところに義父がいた。

「すみません、わたしがいながら」

頭をさげたまま、感情がせりあがって言葉が続かなかった。顔をあげて涙が出そうになった。通りかかった隣家の小父さんに

「いっかっぺ、誰のせいでもないよ」

意外に強い力で肩を掴まれ、涙が引つ込んだ。

義父母の部屋は親族の居場所になって、義父義母それぞれの兄弟と義姉で十人ほどがお茶を飲んでいた。叔母さんが、口元は笑いながらわたしを見据えて言った。

「絶対に子どもを責めちゃだめよ。心の疵になるからね。言いたくなるけど、我慢してね」

危うく感情のはけ口にするところだった。何も言わなくても、子どもはすまなく思っている。

当の叔父さんが入って来た。皆の顔を見るなり、かすれた声を出した。

「布団はどこ」

「縁側にあるのがそうじゃない？」

義姉が応えた。彼は敷布団の側生地を裂き、中の綿を探り手帳のようなものを取り出して、どこかへ行った。義姉が、通帳だよ、とわたしに耳打ちした。

子どもたちが、奥さんに連れられて帰ってきた。わたしを見てうれしそうな顔をしたが、口元や目が少ししか動かない。小屋は残骸だし知らない人が大勢いて、驚いている。

「おばちゃんとよく遊んだよな、いい子だったよ」

「本当にありがとう。助かった」

笑顔を作り、大したことではないようにふるまう。

帰り際、彼女は軽く指をひろげた掌を振り、つられて子どもらも指をつけた掌をそよがした。

「この振り方が、おばちゃんは好きだよ」

元気づけられて、気持ちが上向いた。

「おかえり、おかえり」

しばらくの間ふたりを抱きしめたら、彼らの表情が緩んだ。

消防士が去り、近隣の消防団員も引き上げ、台所の片付けが終わるころ陽が落ちて、地域の人や親戚たちも帰っていった。義母は一番奥の部屋に布団を用意して、叔父さんの居室にした。

「あわててお客用の布団を出しちゃった」

あとで残念がった。

翌朝、猫のクロが吐いた。ご飯を食べず、よろめいて体に力が入らないようだ。朝八時に地域の人と親戚が来た。男性は残骸の片付けで、ウンボで来てくれた人もいる。女性はお茶と食事を用意する。後ろに控えて言われるまま動いた。

午後、昼食の片づけが終わったのを見計らい、クロを動物病院に連れて行った。ノミとり首輪の殺虫成分が原因らしい。入院したほうがいい、費用は三十万円くらい、と言われ、預けて来た。夫に話すと、

「火事を出したばかりでたいへんだから、俺が行って引き取ってくる」

と出かけ、手ぶらで帰ってきた。事情を聞いた医師に、じゃあ三万円でもいいです、と言われたので頼んで来た。クロは一週間後に退院した。

義父は各地の消防団や周りの家々に、日本酒を持ってお礼まいりをした。親戚が、出火見舞いで日本酒や砂糖の大袋を持って来た。二軒先の奥さんが、軽トラックでうちの前を通り、わたしが

庭にいろのを見て停まった。

「どうだ、元気か」

周りの家々にも近火見舞いで、おのおの親戚から日本酒などが届いているようだ。

叔父さんは部屋を覗かれるのも声をかけられるのも嫌だろう、玄関に叔父さんの靴があれば、朝食と夕食時に、部屋の前に食事を置いた。下げに行くと、きれいに食べられていた。二週間ほどたち、夕食時に、義父が言った。

「大将の飯な、作らなくていいからよ。やつは勝手にやっぺ」

叔父さんのことだ。夫が箸をとめた。

「ずっと部屋にいるのか」

「小屋を建ててやらにゃあ、しゃあんめえ。おれの方でやるからよ」

義父は、遠縁の大工さんに頼むことにして、易断所で家相を見てもらったと明かした。焼けた物置小屋は敷地の出入り口に近かった。今度のは奥でいかつべな、と夫に確認した。

食器を洗っていると、義母が来て目を伏せて言った。

「大工はじいさんの従弟だから、昼ご飯を出さなきゃあない。作ってくれるか」

大工さんは、毎日ではなく、体が空いたときに突然来る。朝八時に軽トラックが敷地に入ってくると、茶菓子とポットと急須などをお盆に揃える。玄関のたたきには応接用の机とイスが置いてある。義母は、上がり框に腰かけて、仕事前のお茶の相手をする。どこの誰それが何をしたら、彼女は客とよくしゃべる。

昼前に、早めに公園から帰り、普段より粗菜の皿数を多くして、親戚に見栄を張った。

叔父さんは、大工さんがお茶を飲む玄関を避け、沓脱石のある掃き出し窓から出入りするようになった。出勤する時の靴は袋に入れて部屋に持ち込むらしい。沓脱石にはサンダルだけが置いてある。

外の大きなゴミバケツに、新聞紙で包装され輪ゴムで留められた弁当ガラが入っている。口を縛ったレジ袋で、中味は新聞紙で包まれて、外からわからないものもある。ゴミを見せないという叔父さんの意図は何だろう。個人情報に触れてもらいたくない、ということだろうか。

正月や彼岸やお盆で我が家に兄弟親戚が集まるとき、彼は部屋に居ても宴席に加わらない。徹底して、人とのやり取りを避ける。押し通せるのは強いと感心する。

しかし、子どもたちの目にとまる。

「説明しなくていいの」

と夫に聞いたら、

「知らないだろ」

子どもたちには、黙って現状を受け入れろというこの家の流儀に慣れてほしくない。わたしから話した。

義父母と夫は、叔父さんの存在がわたしにばれても、なんとかなるとたかをくくり、その通りになった。農業は、自然相手だから、見込みを立てても、遅霜や日照りや台風などで計算通りにいかない。起きたことをその場でしのぐのが習性（なら、しょう）なのか。

十月になって、やっと涼しくなった。公園でママ友と子どもを遊ばせていると、ピンクのドレスを着た女兒とその祖母（おば）と思しい年配の女性が来た。知らない人たちが、女兒が千歳飴の袋を下げていた。七五三の早撮りだ。

ママ友が女兒に話しかけた。

「なみちゃん、今日はお姫様ね、かわいい」

女兒は祖母から渡された千歳飴を、黙ってわたしたちに差し出した。お礼を言うと、祖母は勢いよくしゃべり出した。

「孫がお世話になってますよう。おら家では行き合った人に飴を配ることになっているですよ。いてくれて良かったわ」

女兒は、ドングリを拾っている子どもたちの方に歩きだした。

「服を汚さないようにな。すぐに、ご飯食べにお母さんたちと出かけるよ」

祖母は、隣の市のいちご農家で、この近くに住む娘の家に來たと続けた。

「うちも農家なんですよ」

親しみを感じて地区名を口にした。

「火事があったあたりかね。おじの小屋が燃えた」

屋号も知られていた。

「うちです。延焼しなかったのが、不幸中の幸いと言いますか。おかげさまで、家族は元気にやっています」

言い終わると、子どもたちの方に移動した。火事は秘密ではない。ママ友たちに話して心が軽くなった。

隣市まで噂が伝わるのを嫌がっても防げない。あの家の嫁さんに会ったと、茶飲み話に出るかもしれない。彼女らの娯楽と割り切るしかない。

瓦屋根で五坪の小屋が完成するのに一年かかった。叔父さんは再び小屋住みとなった。水回りがないので、洗濯やトイレは前と同じで外だ。

建ててもらった小屋に住む。やどかりが浮かんた。成長して今まで使っていた貝が窮屈になると、体に合ったのを探して住む。かたつむりの殻は自前だが、やどかりの貝は既製品だ。わたしもそうか。叔父さんは生家で、わたしは婚家で、宿を借りる。

彼が井戸でしゃがんで、洗面器の中の服をすすいでいる。後ろにクロがいた。なついているな、と思つて通り過ぎた。洗面器をかえして水を流す音のあと、

「あんたも大変だね」

彼の声がして振り向いた。クロに言ったのだろう。でも、うれしかった。

夫が渋滞を嫌い、紅葉が終わったと見当をつけた十二月中旬に、養老溪谷の大福山に行った。

山は、緑に赤みや黄色みがかつたり、深緑色だつたりして、冬の色だ。黒川沼の周りにモミジの落ち葉が溜まっていた。最盛期はさぞ見事だったろう。子どもの頃の印象を重ねた。

対向車はなかった。後ろから来たバイク数台に抜かれた。イン

ターネットで見つけた観光地図を見て、めがくら橋に來た。

「ここは、めがくらばしでめがくらむーと言うのよ」

後部座席の子どもらに言うのと、彼らはわからないまま一緒に声をあげた。

駐車場に停めて、歩いて道端のテーブルとベンチのある場所で弁当を広げた。遠くまで低山が続いているのを眺める。人の手が届かない、自然の営みの領域だ。

木々で見えないが、ま下に梅ヶ瀬溪流があるはずだ。雨が降り、雨水が斜面をつたって沢筋ができ、合流して溪流になる。流れは、石の壁や底を穿^{うが}つ。地形に沿ってもあるが、浸食の結果でもあるのだ。

家族の都合が自分の都合になり替わっていた。二つを分けるために、自分を大事にすることから始めていこう。

テーブルに戻り、子どもたちにおにぎりなどを取り分ける。次男がウインナーのベーコン巻きを地面に落とした。

「いいよ、あとで拾っておく」

まだ下を向いている彼を抱き上げた。山並みは柔らかな光を受けて、白く光る波頭のようにも見え、水色の空は大きく広がっていた。